

7. 網膜静脈分枝閉塞症の黄斑部灌流状態と視機能および黄斑形態との関連について

○村岡勇貴¹⁾, 加登本伸²⁾, 三輪裕子¹⁾, Rima Ghashut¹⁾, 飯田悠人¹⁾, 村上智昭¹⁾, 鈴間潔¹⁾, 大音壮太郎¹⁾

1) 京都大学

2) 京都大学, 北野病院(大阪市)

【目的】網膜静脈分枝閉塞症(BRVO)の黄斑部灌流状態と視機能との関連を調査する。

【対象と方法】急性期 BRVO の連続症例 30 例 30 眼を対象。黄斑浮腫(ME)に対し, 全例ラニビズマブ硝子体注射(IVR)を行った。治療後 ME 完全消失時に, 視力, 微小視野計による中心 6 度以内の網膜感度を測定。また, OCT による中心窩 EZ 欠損長, OCTA を用いた FAZ, 傍中心窩無 NPA 面積を測定。

【結果】ME 消失時の視力, 傍中心窩網膜感度はともに傍中心窩 NPA 面積が有意に関連した(各: $P=0.005$, $P=0.011$)。

【結論】IVR 後 ME の消失した BRVO の視機能は, 中心窩の視細胞層の状態よりも傍中心窩の NPA 拡大が強く関連していた。

8. 網膜静脈分枝閉塞症の黄斑浮腫に対するラニビズマブ: 投与方法による 1 年成績の比較

○三輪裕子¹⁾, 村岡勇貴¹⁾, 逢坂理恵²⁾, 大音壮太郎¹⁾, 村上智昭¹⁾, 鈴間潔¹⁾, 高橋綾子¹⁾, 飯田悠人¹⁾, 吉村長久¹⁾, 辻川明孝²⁾

1) 京都大学

2) 香川大学

【目的】網膜静脈分枝閉塞症(BRVO)に伴う黄斑浮腫(ME)に対して, ラニビズマブ硝子体注射(IVR)を 1+PRN(*pro re nata*)法ないし 3+PRN 法で行い, これらの治療成績を比較すること。

【方法】対象は, 治療開始から 1 年以上経過観察できた急性期 BRVO 連続症例 81 眼。BRVO に

伴う ME に対して, IVR を導入期に 1 回ないし毎月 3 回投与し, 中心窩に囊胞様黄斑浮腫や漿液性網膜剝離を認めた際に PRN 投与を施行。治療開始 1 年後の視力・中心窩網膜厚(CFT)の各変化量を比較した。

【結果】1+PRN 群は 42 眼, 3+PRN 群は 39 眼, 初診時の症例の特徴に群間で有意差を認めなかった。治療開始 1 年後, 視力変化量, CFT 変化量は群間でともに有意差を認めなかった。治療 1 年後の視力は, 若齢, 初診時の良好な視力, 薄い CFT と有意に関連した。

【結論】BRVO-ME に対する IVR の 1 年成績は, 1+PRN 法と 3+PRN 法で同等であった。

・セッション 3

座長: 小嶋健太郎(京都府立医科大学)

9. 糖尿病黄斑浮腫に対する抗 VEGF 薬の治療効果

○森雄貴, 村上智昭, 石原健司, 吉武信, 藤本雅大, 百々蓉子, 吉武達哉, 三輪裕子, 鈴間潔

京都大学

【目的】糖尿病黄斑浮腫(DME)に対するラニビズマブ硝子体注射(IVR)1 年後の治療効果と, 治療前の囊胞様腔の関係を検討した。

【対象と方法】対象は IVR により 1 年以上治療した DME 症例 45 例 48 眼。OCT を用いて中心窩と傍中心窩の囊胞様腔を評価し, 1 年後の logMAR 視力改善との関連を解析した。

【結果】全例で IVR 施行 1 年後に有意な視力改善が得られた。鼻側の内顆粒層に囊胞様腔を認める症例はそうでない症例よりも視力改善が有意に大きかったが, 中心窩または外網状層の囊胞様腔の有無では視力改善に差はなかった。

【結論】DME に対する IVR 後で鼻側の囊胞様腔が治療効果予測因子であることが示唆された。